

# 鹿児島はお酒の星名伝承でいっぱいー森本先生に捧ぐ

北尾浩一

はじめに

人びとは、暮らしを星空に描いた。暮らしに必要な道具も、暮らしのなかで嬉しいことも辛いことも、星空に描いた。星空にも、自分たちと同じような暮らしがあった。

本研究では、鹿児島県に伝えられている「お酒に関する星名伝承」をもとに、暮らしのなかでのお酒と星を考える。

## 1. 宵の明星…晩酌の星

日々の暮らしのヒトコマヒトコマが、宵の明星と結びついて実に様々な星名が形成された。日々の暮らしのヒトコマ「夕飯」のときに輝く金星も夕飯をもらう、という擬人化がされて、ユウメシモライという星名が形成された。

鹿児島県出水郡長島町獅子島片側（かたそば）で聞いた話である。

「西のほうに大きくひかって、夕飯（ゆうめし）すんだときに西に落ちていく。夕飯もらって落ちていくから、ユウメシモライ」

日が暮れて、家族で夕食を囲む頃、窓から夕飯をもらって嬉しそうに輝く宵の明星（金星）。きっと、ユウメシモライは、夕飯を食べ終えたら満足して沈んでいったのだろう。

夕飯と言えば、晩酌。鹿児島の方言で晩酌のことをダイヤメと言う。晩酌で一日の疲れ（ダレ→ダイ）を止める（止め→ヤメ）のでダイヤメ。

2005年に鹿児島県枕崎の漁港で、日々の暮らしの楽しいヒトコマ「晩酌」が星名となったケースに出会った。

・ダイヤメボシ…鹿児島県枕崎市

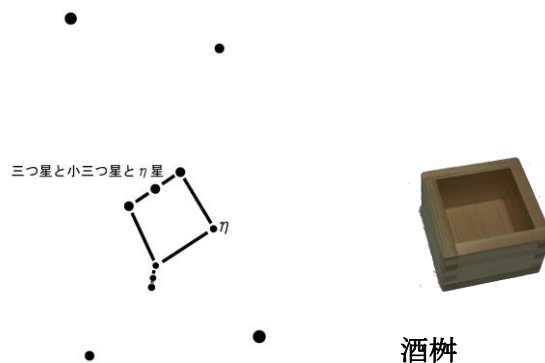
晩酌のときに輝く金星の星名にしたのである。星空の金星とともに晩酌を楽しんで、一日の疲れが癒される。星と生きる喜びであった。

## 2. オリオン座…晩酌に必要な酒榊星

西洋の星座「オリオン座」と同じ部分が日本の星座となったわけではない。西洋の星座と異なるある特定の部分ひとつのみが日本の星座となったわけでもない。次のように様々な部分が日本の星座となった。

- ①三つ星(δ ε ζ) ②三つ星と小三つ星 ③三つ星と小三つ星と η 星 ④小三つ星 ⑤盾  
⑥αとβ ⑦α ζ κ β δ γ ⑧α β と γ κ ⑨α γ β κ

そのなかで、「三つ星と小三つ星と η 星」でつくる配列を、酒榊に見立てた日本の星座が広く伝えられている。



- ・阿久根市港町…サカマス  
    牛ノ浜 …サカマスドン
- ・いちき串木野市…サカマス
- ・薩摩川内市里町里…サカコウ
- ・南さつま市坊津町坊…サカマツ、サカマツドン
- ・枕崎市…サカマス、サカマイ<sup>(1)</sup>、サカマツ
- ・揖宿市山川…サカマツ
- ・鹿児島郡十島村悪石島…サマス星<sup>(2)</sup>、サカマス<sup>(3)</sup>

内田武志氏著『星の方言と民俗』に、枕崎市に伝えられている酒榊星がスパイ（スバル、プレアデス星団）を追いかける伝承が掲載されている。

「スパイが酒を飲んでその酒代を払わずに逃げたので、その後を酒屋のサカマスが追いかけて、西方でようやく捕えたので、沈む時は一しょになるのだ」<sup>(4)</sup>

「西方でようやく」と記されているように、簡単には追いつかない。「一時間、二時間じゃ追いつきませんわ」と語ってくれたケースもある。果たして、本当に追いつくのだろうか。

酒榊星とスバルが同時に沈むときをもって追いつくとすると、鹿児島県枕崎では追いつかない。しかし、例えば、西暦1900年の場合、プレアデス星団が高度約0.9度になったとき、オリオン座三つ星の高度は約10度と低く、そのような状態を追いつきつつある状態と考えることはできないだろうか。

星が追いかけるという伝承については、アイヌの伝承が北海道において記録されている<sup>(5)</sup>。ギリシア神話においても伝えられている。アイヌの伝承のケースを、北海道河西郡芽室町の緯度で考えると、ほぼ伝承の通り追いつき、北海道稚内市の緯度（北緯約45.4度）では完全に追いつく。そして完全に追いつく地点は、西暦1500年には北緯約47度、1000年には北緯約50度と時代をさかのぼるにつれて北の方へ移動していく。

完全に追いつく地点、即ち伝承の形成条件を完全に満たす地点が時代をさかのぼるにしたがって北へ移動することは、北の方で形成された伝承が南へ伝えられていった可能性があることを示している。少なくとも、南で形成されたものが北へ伝えられたと考えるのは困難である。

伝承の形成条件から考えると、プレアデス星団が天頂を通り農耕の目標になったという沖縄県の伝承については、南の方から伝えられた可能性がある。それに対し、星が追いかける伝承は北の方で形成された可能性がある。

### 3. 星をお酒に

暮らしの様々な場面で、星とのかかわりがあった。星と人とのかかわりは、過去から未来へと連続して創造される多様で豊かな営みである。そのひとつが、「星をお酒に描く」。例えば、徳之島の黒糖焼酎「徳之島群星（むれぶ）」「徳之島星波」、沖縄県石垣島の「泡盛群か星（むりかぶし）」等。

暮らしの様々な場面が、星とかかわること、それは、何も特別なことではなく、もともと人間にとって、あたりまえなこと。これからも、すべての人びとに、それぞれの星とのかかわりが育まれることを願い、調査研究を続けたい。

### 注

- (1) 内田武志『星の方言と民俗』岩崎美術社、1973、p.104。
- (2) 早川孝太郎「悪石島見聞記」『民族学研究3』、国書刊行会、1977、p.724。
- (3) 下野敏見『トカラ列島民俗誌』第一書房、1994、p.160。
- (4) 内田、前掲書、pp.85-86。
- (5) 吉田巖『アイヌ古事風土記資料 No.3』帯広市教育委員会、1957、p.97。